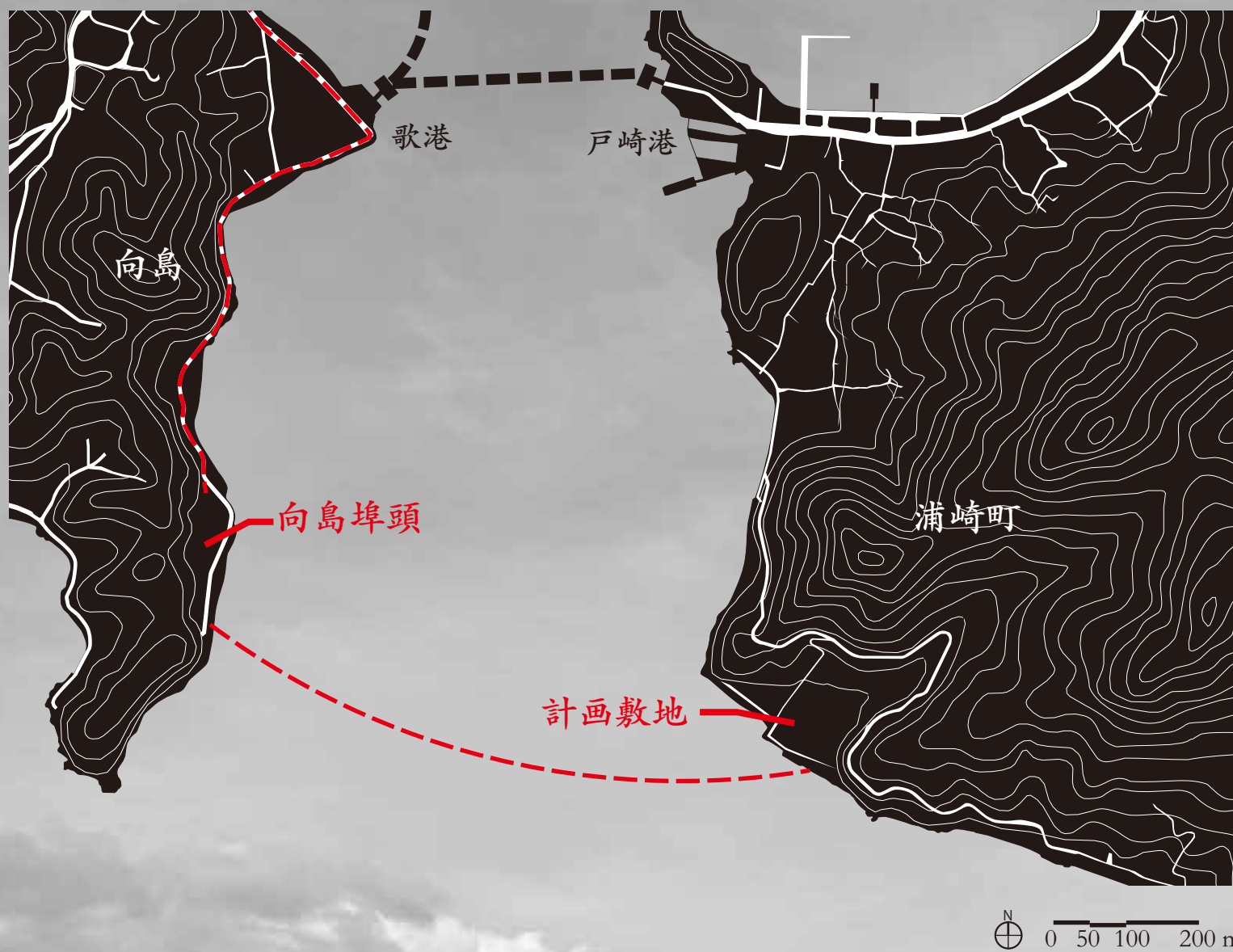
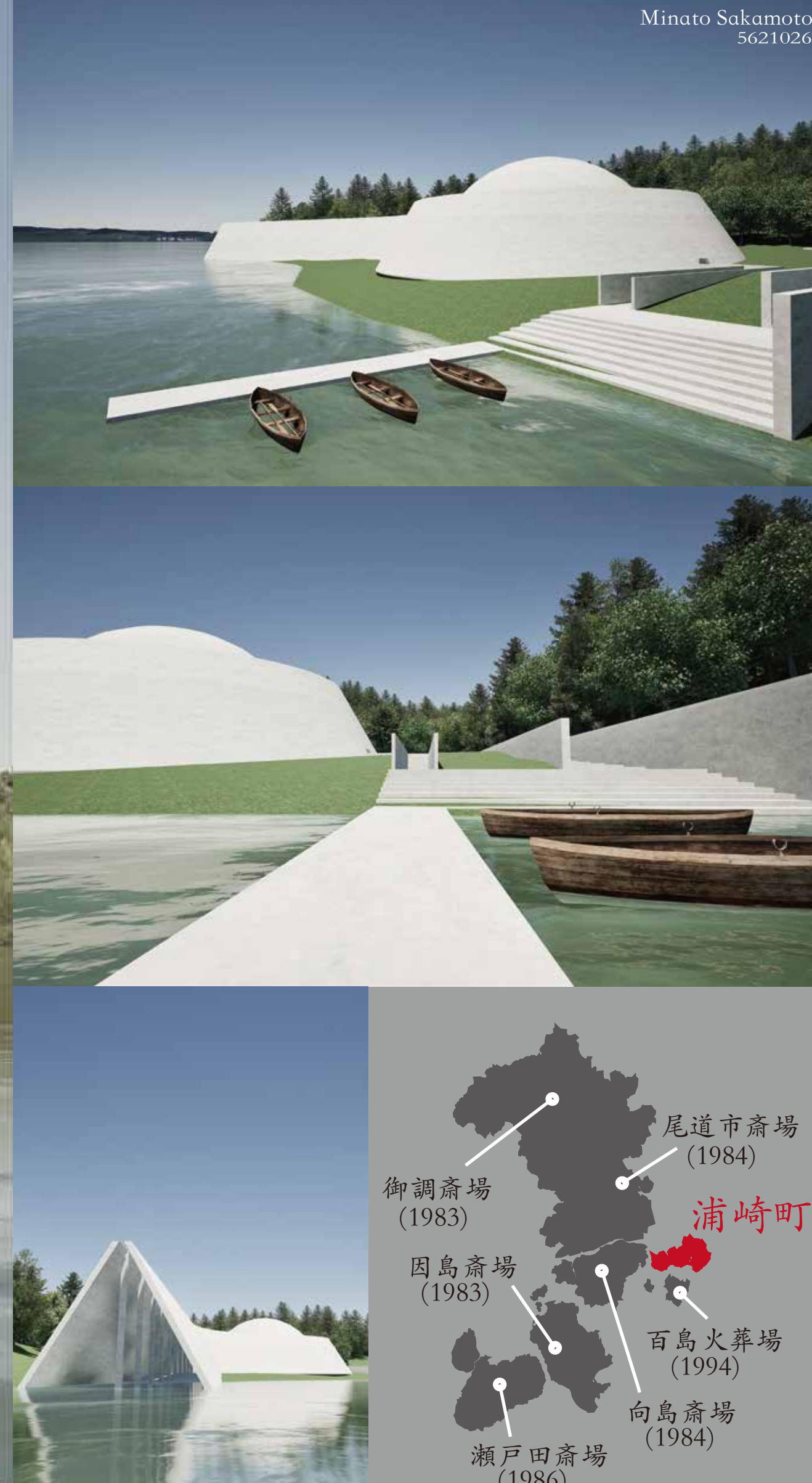


ハライソワカ

尾道市浦崎で故人を偲ぶ



目的

現代の日本は、暮らしてから「死」を遠ざけている。社会問題や家族形態の変化によって引き起こされた墓制度の見直しは、それまでのこだわりや固定観念にとらわれず、主体的に死後のあり方をデザインする流れを顕著にし、葬送方法を多様化させた。とりわけ樹木葬や海洋散骨等の自然へ故人を送る葬送の形が広がりを見せる。樹木葬の本来のコンセプトは、自然に溶け込み土に還ることであり、対象に対して祈るのではなく、環境に眠っていることを感じるものであるため恣意的に作った印象やシンボル性がなく、環境に溶け込む。日常生活空間に溶け込むこれらは、墓地特有の忌避感を取り除かれ宗教色が弱く、墓地にいる感覚すら忘れさせる。無縁墓や納骨堂などの継承や管理の必要がない墓が普及することは次第に墓へ赴き、手を合わせ、故人への祈りや弔いを行う文化そのものを喪失させてしまうのではないだろうか。死を思うことが生の実感につながり、死を意識しながら生活することが日頃の充実感につながることもある。そこで、人々の生活圏から隔絶された土地の特徴を活用し、専用のアプローチによって異界性を高めたこの場で樹木葬と海洋散骨を行う。祈りや弔いの機会を失いつつある現代の人々が、故人へと想いを馳せる宗派を問わない純粋な祈りの場を形成する。

弔いの流れ

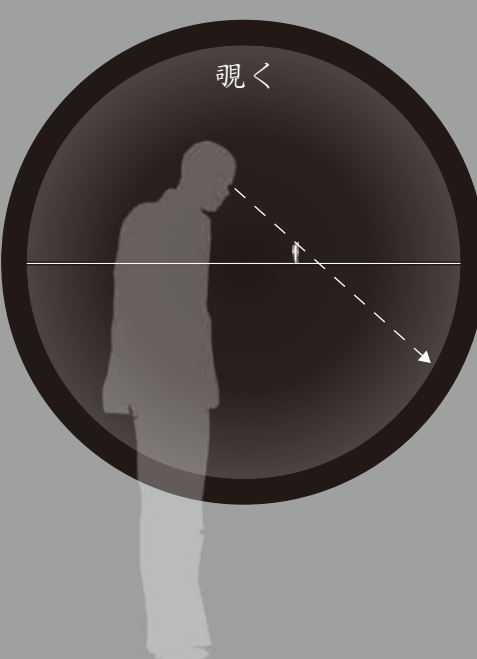
墓参りという一連の出来事をつくりあげるため、墓地へ向かうための専用の経路を設ける。計画敷地へつながる海岸沿いの既存道路からは、関係者以外の進入を断ち、浦崎町内からは墓地へ入れないようにする。墓地を訪れる人は、まず陸路で向島側の棧橋まで向かう。この際、向島の歌港から戸崎港へ渡る既存のフェリーを利用するのではなく、さらに海岸沿いを進んだ先にある、現在は運動場となっている火葬場跡地に向かう。ここに新たに設ける埠頭から小舟に乗りかえ、浦崎側の墓地へと向かう。

社会背景

多死社会となった現代、日本人のライフスタイルの変化に伴い、地縁にもとづく家制度を前提とした伝統的な弔いのあり方がそぐわなくなっている。

2025年には約800万人いる全ての団塊の世代が後期高齢者(75歳以上)となることで、国民の5人に1人が後期高齢者にあたる超高齢化社会を迎える。このことから今後も墓の需要が高い事が分かる。しかし墓の需要が増す一方で、大都市では人口の集中によって墓不足が顕在化したことで、合葬墓や納骨堂の需要が高まり、果てには墓を必要としない人もいる。また、地方でも人口減少や過疎化の端を受け、墓の管理が行き届かない、もしくは継承者がいないことから、無縁墓が増えている。

空間構成



1) 供養の中心であり起点となる場所に球体を配置する。半球にならないように下にも空間を残す事で、この球体を通り抜ける人は無意識に下を覗く。すると自然と首が下がり祈っているようにも見える。

尾道市の現状

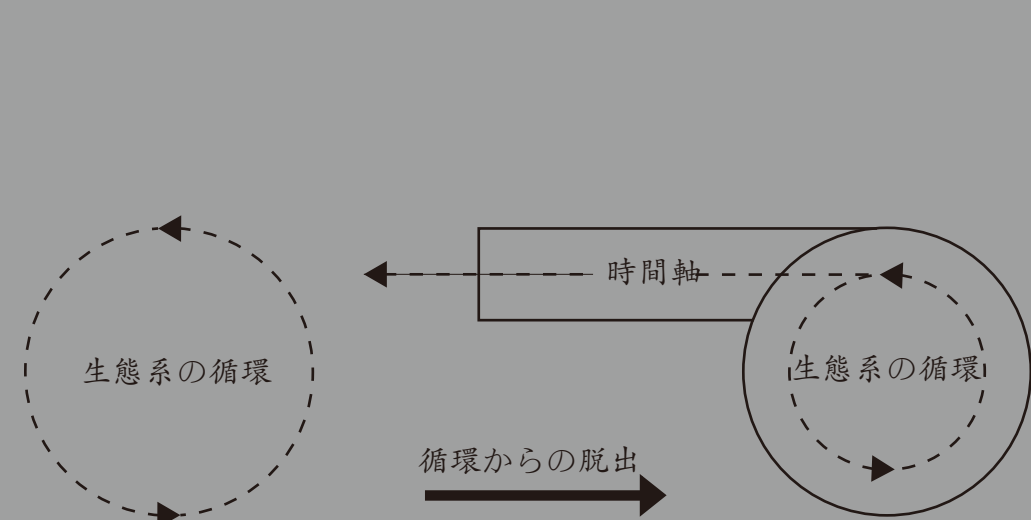
尾道市では、市民の高齢化から今後も墓地や火葬場、斎場に大きな需要はあるものの、人口が減少していることで、火葬施設における一件あたりにかかる施設の運用コストが高くなっている。また、2017年には尾道市公共施設等総合管理計画1)を策定し、公共施設やインフラ資産の利用状況や老朽化を調査修繕したが、現存するその多くが1985年前後に建設されたものであった。火葬場や斎場を例にとると、最も古いものは1983年、逆に最も新しいものでも平成6年のものであり建設から30年が経過している。これらの施設の多くが今後20年以内に耐用年数を迎えるため、修繕や建替が必要になる。

敷地分析

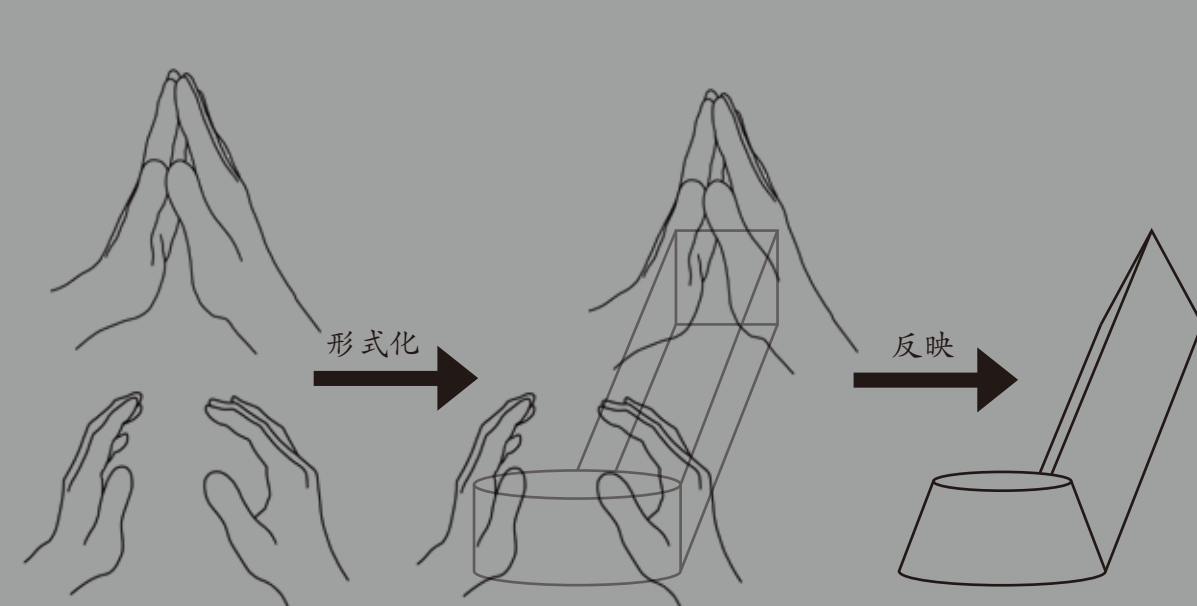
尾道市浦崎町は、市町村の合併によって地理的に分断されていた飛び地である。向島の歌港からフェリーを利用する、もしくは松永を経由して回り込む事で渡ることができるが、陸路は大きく遠回りになるため、実質フェリーの利用に限られる。浦崎西側の戸時は島の大半をカガラ山が占めており、住居や公共施設が北側と東側に集中することで、南東に位置する計画地周辺は人の往来が極めて少ない。また、周りが山の傾斜と海によって囲まれる事で視覚的に遮断されている。飛び地という地理的分断と山による視覚的な遮断、動線の限定によって人々の生活圏から隔絶された地となる。

仮設設定

本計画では、現在旧市町村単位に設置されている6箇所の火葬場及び斎場が市の合併により機能重複している事を鑑みて、2町1箇所配置の3箇所に統廃合し、尾道市・御調、瀬戸田・因島、向島・百島の組み合わせで施設を利用すると仮定する。また、5つの地域は全て火葬設備を併設した斎場だが、百島の施設は火葬設備のみの火葬場であることに着目し、向島と百島を繋ぐ航路の中継地点に位置する浦崎町にて、葬送に特化した空間を造る。



2) 多くの生き物にとって死は生態系の循環における一部であり、環境や他の生物に還る。しかし、人間においてはこの限りではなく、墓へ入ることでこの流れから抜け出す。ここで、時間の変化を太陽の動きから読みとり、先の動きに合わせて西に抜ける長方形を配置する。



3) 手を合わせて冥福を祈るという日本人に馴染み深い祈りの動きを型取り、壁面全体を斜めにする事で開いた空間が閉じるように造形する。これにより動線に沿って徐々にスリットが狭まり、躯体そのものが祈っているような姿となる。

